

# 助成年度：平成 17 年度

[所属] 宮崎大学 農学部

[役職] 教授

[氏名] 三浦 知之 (他計 2 名)

[課題]

## 里浜としての都市港湾内干潟の重要性

－宮崎市一ツ葉入り江の例－

[内容]

このプロジェクトは、小規模干潟の生物相形成の機構および希少種存続の要因分析を通して、今後の水域環境の保全に役立てるとともに、都市近郊の海岸湿地を「里浜」として市民に啓蒙することにより、自然環境の保全に関する新たな社会教育材料を提供することを目的としている。一ツ葉入り江での出現生物種数は、本研究によりさらに増え、貝類 38 種（巻き貝類 18 種、ツノガイ類 1 種、二枚貝類 19 種）、甲殻類 39 種（カニ類は 31 種）となった。一ツ葉入り江と比較するため、宮崎や鹿児島県の太平洋岸の河口干潟等を調査したが、この入り江がその規模に比較して極めて多様な生物を維持していることが判明した。入り江全体では、カワアイが約 5 万個体、ヘナタリが約 2 万個体、フトヘナタリが約 1 万個体、コメツキガニ 70～200 万個体、チゴガニ・ハクセンシオマネキ各 16～50 万個体が生息すると推定される。入り江には数多くの絶滅危惧種が生息しているが、なかでも二枚貝のイソシジミ・オチバガイおよび巻き貝のヘナタリ・カワアイについてはその生活史がほぼ解明された。これらの学術的知見を元に、直接一ツ葉入り江の保全に関連した活動として地域の自治会等で 2 度講演し、入り江での干潟観察会を 2 回、学生実習を 1 回、生物紹介のための水槽展示を 2 回実施した。また、他地域でも一ツ葉入り江での知見を元に観察会を実施し、講演会等に参加した。